

私の見たアメリカと日本 — マサチューセッツより —

伊 藤 真 樹

住友金属工業(株)研究開発本部 工博

1. は じ め に

1988 年 7 月より 2 年間マサチューセッツ州 Amherst にある UMass こと University of Massachusetts の Department of Polymer Science & Engineering (PSE), LENZ 教授のもとに留学した。Amherst は Boston の西 150 km にある人口 2 万程度の小さな大学町であり、付近には UMass の他に Amherst College, Smith College, Mt. Holyoke College, Hampshire College があり、5 大学のコミュニティーを作っている。北海道大学の創立に貢献した CLARK 博士は UMass の先生であったし、新島襄が留学した Amherst College は全米で一、二を争うハイレベルの大学である。Mt. Holyoke College はこの国で一番古い女子大で、Smith College は Nancy REGAN, Barbara BUSH も卒業した女子大である。つまりこの地域はいわば一大文教地区といえる。

米国における大学・教育システムについては本誌のこの欄でたびたび紹介されているので¹⁾、私としては米国での生活にも触れ、また国際社会からみた日本についても感じるところを記してみたい。ただし、バラエティーに富んだ米国のこと、極端に言えば以下に書くのは Amherst のことであって、必ずしもアメリカのすべてを反映しているものではないことをお断りしておきたい。

2. UMass での研究生活と米国の大学教育

UMass は州立の総合大学で医学部など一部の学科が Boston, Worcester にある他はほとんどが Amherst にある。PSE は大学院のみからなり、世界有数の高分子研究センターの一つである。したがって日本の高分子関係者でこの学科に留学した人はたいへん多く、現在も常に 10 人前後の日本人留学生がいる。また外部からの訪問者による講演も平均して週に 3 回以上ある。LENZ 研は、私がいた 2 年間に在籍したのべ 30 人のうち、アメリカ人はわずか 8 人で、残りの人の出身国が 13 か国にも及ぶという国際的研究室であった。

研究室の構成人員はポスドクと呼ばれる我々のような研究員と大学院生である。大学院生はほとんどが Ph. D. 取得を目指しており、そのための資格として

Cumulative test という範囲無制限の試験に、PSE では 10 回中 5 回以上合格しなければならない。この試験は最新の雑誌からも出題される厳しいもので、実際に 6 回不合格となり入学後 2 年半たったところで他大学へ移っていった学生もいた。この場合、修士をもっていてほとんど何の足しにもならず、大学院を一からやり直すことになる。このようなシステムのため初めの 2 年間は実質上研究にはならず、3 年目以降研究生活に入るというのが実状である。

実験室での働きぶりは日本と大同小異である。PSE 全体でみれば、24 時間、土・日もおそらく誰かが実験している。しかし日本の大学のような圧迫感はなく、皆自分のペースで仕事をしている。夫婦共働きのため午前中は子供の面倒をみて、午後から夜中まで働く人もいた。

またアメリカの大学では、特に若い教官の自由さという点では日本とは比較にならないものがある。講座制をとっている日本の大学では、すべての決定権が教授の主観にあり、助手などの自由がきわめて制限されていることが多い。このような日本人若手研究者に比べ、米国では 30 才前後の新米でも独立した Professor であり生き生きしている。

一方、日本のように助手が一実験室を管理しているということがないので、ある装置の使い方を知っている人が卒業してしまうとあとに誰もいないというような不都合が生じ得る。このような穴は、新入学生の実験指導も含めてポスドク制度によって埋められているといえる。また工学部に相当する学科では研究費のほとんどが企業等からの Fund によっているため、若い Assistant professor などは Fund のとれる研究テーマを選ばなければならず、成果を示すために研究がショートレンジになってしまうこともあると聞く。

このような Fund の用途のかなりがポスドクの給料と大学院生の奨学金に充てられる。PSE では学生は無条件に年間 1 万ドルの奨学金がもらえ、返還不要である。このような制度があることもあり、就職経験のある 30 才を超えた学生も多い。しかしこれはむしろ会社等をやめて大学院に入学し Ph. D. をとれば、より本人の希望する職種につけたり、給料もよいという社会的条件を反映してのことと思う。米国では何才になっても自分が勉強したいと思えば大学はそれを受け入れてくれ、社会もそれを許容する。教育の機会の自由さにはすばらしいものがある。

アメリカ人達が大学に入って勉強するのにははっきりした目的があり、勉強すればそれだけの見返りがある。これに対して日本では大学以降の教育に対する社会からの要求は弱い。海外留学にしても、特に企業派遣者にとっては、帰国後留学で充電したことをバネにして研究者としていっそう飛躍できるような研究環境が与えられないことが多いようである。したがって留学期間中とい

うのは、研究に没頭するにせよ、余暇を楽しむにせよ、日本人留学生にとっては現実離れした特殊な時間になってしまうことが多い。また、私が接した各国の人々を通して見る限り、少なくとも化学の分野では、Ph. D. をとることやポストドクをすることが、就職や給与にきわめて有利な条件とならない国は日本だけのようにみうけられた。このような日本の社会的条件は研究者にとってたいへん残念なことで、「基礎研究ただ乗り論」、「ノーベル賞受賞者が少ないこと」とも関連のあることではないだろうか。

3. Amherst での生活

米国では治安が問題となることがよくある。実際デトロイトやニューヨークでは日本で考えられないような治安の悪い地域がある。しかし Amherst のような田舎町では治安その他の条件が日本よりもはるかによい。

多くのアパートは大学まで歩いて行ける距離にあり、そうでなくても無料のバスが 10~20 分ごとに走っている。車で 10 分走れば大きなスーパーマーケットが数軒あり、中には 24 時間営業しているものもある。日本の食料品もたいていのものは手に入る。物価は新聞紙上では日本の 70~80% と報告されているが、実際にはもう少し安いように思う。特にコシヒカリ並みのカリフォルニア米、牛肉、ガソリンが日本の 1/3~1/4、渋滞のない高速道路のほとんどが無料で、有料であっても日本の 1/10 であることなどが目立つ。家・土地については問題外である。

アパートは木造で広い敷地に散在している。私の住んでいたアパートは 2 ベッドルーム、日本式に言えば 2 LDK であるが、80 m² の広さであった。小家族ならば 1 ベッドルームアパートで十分で、それでも 60 m² 以上ある。家賃は 605 ドル (約 9 万円) で決して安くはなかったが、冷蔵庫、コンロ、オーブン、食器洗い器等がついており、クローゼットの中に衣服を吊るせるので洋服だんすなど買う必要がない。水道、湯、暖房費も含まれており、管理費もないので家賃以外に必要なのは電気代と電話代だけであった。調理がコンロ、オーブン共に電気であるにもかかわらず電気代は月 4500 円程度であった。ガスコンロのあるアパートではガス代は無料である。暖房はたいへん強力で、冬期には気温が零下 20°C にまでなるが室内は四六時中 25°C に保たれている。住宅エリアの外は原生林か野原で、数え切れない種類の小鳥、りす、兎、あらいぐま等があり、町はずれには牧場がある。

文化的な例を音楽にとると、5 大学のホールを中心に毎日いくつものコンサートが開かれ、夏期には数々の音楽祭が近隣 (車で 1 時間くらいの距離) で開催される。Boston までは車で 2 時間で、8 時からの演奏会が済んで 12 時には帰ってくることができる。しかも日本では

1 万 5 千円もするボストンシンフォニーオーケストラが 20 ドルで聴ける。

文化についてはヨーロッパの香りをたたえるニューイングランド地方[†] ならではのものがあるが、生活環境はこの程度の田舎町ならだいたい似たりよったりであると思う。これが貿易赤字国アメリカの実態であるが、アメリカ人の多くは経済大国日本での暮らしはもっと豊かだと思っている。確かに人々の暮らしぶりはむしろ質素である。一例として、日本のように贈答品、ブランドもの、化粧品等が高価だからこそ売れる、というようなことは絶対にない。日本国内での日本製の化粧品より定価が安いヨーロッパのブランドものの化粧品が、それでも高く売れないのでディスカウントされるというのがアメリカであり、逆にアメリカのスーパーマーケットで売っている庶民向けのシャンプーが、目をむくような高い値段で売られているのが日本である。

4. おわりに

アメリカ人に昼食を誘ったら "I'd love to, but I have to go somewhere right now" と言って断られたことがある。No も not も登場しないたいへん丁寧な断り方である。逆に日本人に同じように英語で誘うと、英語の不自由さからではあるが "No" と一言、強烈なパンチをくらうことがある。日本人の言い方は間接的で遠回しであるのに対し、欧米人は直接的表現をすると言われるが、場面によって必ずしもそうではない。

いろいろな国の人と会ってみた結果、少なくとも個人と接するときには、その人の出身国の文化の違いによる感覚の相違を感じるよりも、同じ人間としての共通点を見いだすことの方がはるかに多かった。出身国にかかわらず親切な人は親切だし、感じの悪い人は感じが悪い。一方がおじぎをしているときに、相手は握手をするために手を差し出しているというようなすれ違いはあっても、それは表面的なことであって、挨拶する心は同じである。どの国にもこの表面的な違いにとらわれて相手を異質だと思い込み、自ら壁を作ってしまう人はたくさんいると思うが、日本人は特に厚い壁を作っているようである。これから留学される方も多いと思うが、「ガイジン」ではなく、同じ人間としての外国人に接し、まだまだ閉鎖的な日本人の殻を破り、しかしアメリカかぶれなどには決してならず、既成概念ではない自分の考えをしっかりと持った国際人になってほしいと思う。

文 献

- 1) たとえば、木村雅紀: 鉄と鋼, 73 (1987), p. 220
皆川邦典: 鉄と鋼, 73 (1987), p. 911
橋本敬三: 鉄と鋼, 74 (1988), p. 196

[†] 米国北東部の Maine, New Hampshire, Vermont, Massachusetts, Rhode Island, Connecticut の 6 州をいう。